

福祉文教委員会資料  
令和5年3月7日提出

## 答 申 書

嘉穂劇場等文化施設の活用の方策に関する事

令和5年2月17日

飯塚市文化施設活用検討委員会

## はじめに

1931（昭和6）年、前身の劇場が火災、台風という不運が重なり倒壊した中であって、この地に根付いた劇場文化の灯を絶やすまいと、江戸時代の歌舞伎様式を伝える木造2階建ての芝居小屋が飯塚の地に再建されました。嘉穂劇場です。

以降90年もの間、途切れることなく運営を続け、その間2003（平成15）年7月の大水害で壊滅的な被害を受けるも、多くの芸能人や地域の人々に支えられ復興した嘉穂劇場でしたが、2019（令和元）年末に全世界で発生した新型コロナウイルス感染症は多くの演劇や音楽イベントを中止に迫り、嘉穂劇場もやむなく2021（令和3）年5月に運営母体のNPO法人嘉穂劇場が解散し、休館せざるを得ない状況になりました。

2021（令和3）年9月に飯塚市がNPO法人嘉穂劇場から贈与を受けた嘉穂劇場について、今後とも魅力ある施設として活用するための方策等について審議をすべく、飯塚市文化施設活用検討委員会（以下「活用検討委員会」）は2022（令和4）年3月23日に飯塚市教育委員会から「嘉穂劇場等文化施設の活用の方策に関すること」の諮問を受けました。

これを受け、2023（令和5）年1月30日まで8回にわたる活用検討委員会開催によって各種基本情報を得ながら委員で審議を重ね、その結果を取りまとめましたので、ここに答申いたします。

なお、活用検討委員会では毎回それぞれ専門の立場から活発な議論が交わされ、本答申に記載した内容以外にも様々な提案や指摘があったところです。このため、答申書には答申に至る協議の内容やその背景となる考え方なども整理して記載しております。嘉穂劇場の再開に当たっては、協議を重ねてきた内容にも十分配慮いただき、具体化に取り組んでいただきたいと思います。

今回の活用検討委員会の議論の中で、嘉穂劇場は改めて飯塚を含む筑豊の歴史や文化を物語るだけでなく、ノスタルジックな雰囲気は逆に多くの人々の共感を生み、現代に新しい形で歴史や文化芸術を発信することのできる、飯塚市の貴重な財産であることを確認しました。

嘉穂劇場が再開した暁には、劇場の多様な活用によって地域の中核的施設となり、地域の賑わいを創造するとともに、市民をはじめ演者の方々や海外の方々からも愛され、親しまれる劇場となっていくことを心から願っております。

## I 答申

嘉穂劇場等文化施設の活用の方策に関すること

(1) 嘉穂劇場の文化財としての価値を損なうことなく、地域経済の活性化に寄与する活用方策について

1931（昭和6）年に建造された嘉穂劇場は、石炭により繁栄した筑豊の歴史と、そこで生きてきた人々の暮らしや文化を今に伝える貴重な建造物です。明治期から昭和初期にかけて、遠賀川流域一帯には約50もの劇場が開設されたようですが、今日まで残る劇場は嘉穂劇場だけであり、室内においても当時の意匠や舞台機構が保存継承されています。このことにより、嘉穂劇場は2006（平成18）年に国登録有形文化財となりました。

このような文化財的な評価に加え、芝居小屋としても国内に現存する芝居小屋の中では最も規模が大きく、時代の変化を受けつつも90年もの間形を変えることなく運営が継続された唯一の劇場であり、現存する芝居小屋の中でも際立った特徴を持つ、評価の高い劇場です。

このように希少性が高く、この地の歴史を語ることができる嘉穂劇場は、本市を特徴づける貴重な財産、市民の誇りとしてこれからも活用していくことで、人々の交流を生み、経済活動を活発にし、地域の賑わいを創造することができると思います。

かつて嘉穂劇場は人々が楽しみを求めて集まる場所、娯楽の殿堂でした。嘉穂劇場が時代を超えてこれからも人々の出会いと感動をもたらすことのできる施設として多くの人々から愛される施設であるよう、その活用の方策として、以下のとおり嘉穂劇場に4つの性格を持たせることを提案します。

- 今後とも劇場としての性格を持ち続けていくこと
- 劇場として使用しない時には、多目的公共施設としての性格を持つこと
- 観光資源として機能する施設としての性格を持つこと
- 文化財としての価値、性格を持ち続けていくこと

時代を超えて今に残る嘉穂劇場が、これまでの公演内容や利用のしかたにとらわれることなく、新たなエンターテインメントを提供し、飯塚市の文化芸術や観光の振興に欠かせない施設として、長く愛されていくことを期待しています。

嘉穂劇場等文化施設の活用の方策に関すること

(2) 嘉穂劇場と飯塚市文化会館をはじめとする文化施設や周辺商業施設との連携による活用方針について

嘉穂劇場は中心市街地に位置し、周辺には飯塚市文化会館「イヅカコスモスコモン」(以下「コスモスコモン」)や図書館、公民館、男女共同参画推進センターを併設するイヅカコミュニティセンターが立地するなど、飯塚市民の文化活動と知的好奇心を満たすエリアに位置しています。また、昭和通りや本町商店街・東町商店街など商店街や飲食店街が立ち並んだ飯塚市の商業中心地に隣接しています。さらに、周辺には江戸時代の長崎街道筑前六宿の飯塚宿跡が存在し、寺院や史跡などが数多く残る場所でもあります。

近年、実施された中心市街地活性化事業によって、居住機能と多様な都市機能を集積させるコンパクトなまちづくりを展開した結果、中心市街地の居住者は増加し人々の往来も徐々に増加していましたが、2019(令和元)年末に発生した新型コロナウイルス感染症の影響によって、人々の往来とふれあいの機会は大きく減少し、ウィズコロナ政策によって、徐々に人々の交流機会は増加してきているものの、中心商店街の人通りはまだ以前のように回復していません。

一方で、生活に様々な制約が求められるコロナ禍にあつて、人々に心の安らぎや明日への希望を与えてくれるものは文化や芸術であることも、改めて確認することができました。飯塚市にコスモスコモンと嘉穂劇場が近接立地していることは、飯塚市の強みであり財産です。この両者について、「コスモスコモンは市民の文化に触れるすそ野を広げる役割をもつ施設として、一方、嘉穂劇場は他にはない飯塚の『とんがった魅力』を引き出す施設として」役割・性格を整理し、両者が連携を図っていくことが本市の文化振興の発展、地域の活性化に大いに寄与するものと考えます。

さて、飯塚市内には令和4年11月にオープンした大型農産物直売所「カホテラス」や令和5年夏の「ゆめタウン」開業によって、交流人口が大きく増加する明るい兆しが見えています。地域経済の活性化においては、これら増加する交流人口を「点」で存在する各施設だけで受け止めるのではなく、市内の観光・商業施設と結びつけ、市域全体で本市を訪れる人々を楽しませる要素を様々な持ち合わせていくことが求められます。

そのような中、嘉穂劇場はその役割を大いに担うことができる施設です。嘉穂劇場の持つ特性を生かし、他の劇場等では見られない公演の演出による人々の集客にとどまらず、公演以外の場面でも嘉穂劇場で楽しんでいただき、今後さらに周辺の文化施設や商業施設との連携によって地域に賑わいをつくるために嘉穂劇場をどう活かしていくか、具体的提案を以下のとおり示します。

- 劇場内の施設や設備のうち、文化財の価値を構成する部分については確実な保存を図りつつ、劇場運営を含む活用の広がりに伴って生じる機能の追加や用途の拡充が必要な部分については適宜整備・改善を行い、新たな演者、利用者等を獲得できる施設へと変化
- 地域の歴史を背景に、創業者が演者等と共に築いてきた嘉穂劇場の歴史や舞台機構をはじめとする設備等の意味を理解してもらうなど、ストーリー性を際立たせた劇場の公開（劇場内に残る小道具やポスター等の魅力的な展示を含む）
- 嘉穂劇場に行かなければ出会えない、ユニークなヒト、モノを地域で発掘（ユニークなボランティア案内人の養成、新たなお土産の開発 など）
- 周辺の店舗等を巻き込み、多くの人々に自慢したくなるような劇場体験プランの提供
- 劇場前広場（現駐車場）の有効活用により、賑わいや交流の場を創出
- Web や SNS、紙媒体などを活用して発信力を強化するとともに、利用した人が発信したくなるイベント等の企画・開催

さらに、中心市街地にある劇場としての性格を持つ嘉穂劇場が、地域の賑わいづくりに役割を果たすこととして、平日の賑わいをいかにつくることができるかについても重要になってきます。

そのためには、嘉穂劇場やコスモスコモンのある中心商店街の商業エリアにおいて、まちの賑わいづくりのゴールイメージを多くの関係者が共有し、それぞれの連携で何ができるか、またそれぞれ何ができるかなど早期に協議していくことが重要です。同じベクトルのもとで、嘉穂劇場からの発信にとどまらず、周辺商店街、各店舗それぞれが魅力を発揮するとともに、一体となってこの地域の明確な特色やワクワク感を発信できるエリアとなることが求められます。

## まとめ

これまでの活用検討委員会で、これからの嘉穂劇場が将来にわたって愛され利用される劇場として存在していくために、劇場利用者として繰り返し語られていた対象者は、市民の中でも特に「子どもたち」でした。

これからの嘉穂劇場に期待するイメージとして、活用検討委員会では「市民」、「子ども」、「演者」、「外国人」それぞれに、どのように映る劇場であってほしいかを整理しましたが、その中でも特に「子どもたち」に劇場のことを知ってもらい、利用してもらい、そして大切に思ってもらうことが今後の劇場の存続において重要であるという認識に立ったところです。

子どもたちがこの劇場で筑豊の歴史や文化芸術に親しみ、表現することの楽しさ、他者と力を合わせて物事を成し遂げる体験を重ねることは、子どもたちの豊かな感性を育むだけでなく、郷土に対する愛着や誇りを育むことにつながり、ひいてはグローバル社会で活躍する際の心のよりどころとなっていくものです。

一方、嘉穂劇場には、今後とも多くの人々の心のよりどころとして記憶に深く残り、また交流や感動を生む場所として残っていくために、伝統的な部分と革新的な部分とを備えた劇場としての魅力を発信しつづけることが求められます。

嘉穂劇場でなければ体感できない古さと新しさを兼ね備え、進化し続ける『娯楽の殿堂』として、これからも地域で愛され利用される劇場であることを願ってやみません。

## II 答申に至る協議・考え方の整理

### 1 嘉穂劇場の評価

#### (1) 文化財、芝居小屋としての評価

国登録有形文化財の嘉穂劇場について、活用検討委員会委員が共通認識をもって今後の活用方策について検討するため、活用検討委員会では、まず嘉穂劇場とはどんな施設であるか、90年の歴史を持つ劇場の価値・評価等を明らかにする作業から始めました。

文化財としての評価、芝居小屋としての評価を下記のとおりまとめています。

##### ① 文化財としての評価

- ・ 2006（平成18）年11月29日、福岡県42番目の国登録有形文化財に。
- ・ 「国土の歴史的景観に寄与する」建物として評価をうける。
- ・ 1931（昭和6）年に建てられた木造2階建ての芝居小屋で、明治期から昭和初期に筑豊地方につくられた劇場建築で唯一の遺構（希少性の評価）。
- ・ 建設当初の外観及び室内意匠と建築構造、そして芝居小屋の機能が現在に保存・継承されている（文化財の完全性）。
- ・ 近代の建築技術を組み合わせて、屋根を軽量化させて収容人数を上げた劇場建築であることも評価。
- ・ 文化財としての価値を保ちながら、活用を通して新たな価値を見出していくことがさらなる評価につながる。

##### ② 芝居小屋としての評価

- ・ 1880年代の終わりごろから地方で爆発的に芝居小屋が増加し、筑豊には約50の劇場が開場。
- ・ 歌舞伎に加え、新派や家庭劇、喜劇、新劇、寄席や舞踊など様々な演目が行われるようになり、みんなの嗜好が多様化した真っ只中に（1931（昭和6）年）嘉穂劇場は建設される。
- ・ 芝居小屋の建設は、その時代の最先端の技術を用い、演目も社会の嗜好を反映（文化の発信地）。
- ・ 現存する芝居小屋の中で最も規模の大きい劇場。
- ・ 映画専門館やテレビの登場によって、多くの芝居小屋が他の目的に転用されたり閉館した中で、1930年代から劇場として途切れることなく運営されてきたことに非常に高い価値がある。

## (2) 市民、関係者から見た評価

これまで嘉穂劇場の運営や利用に携わってこられた方々に、これまでの嘉穂劇場の評価とともに今後の嘉穂劇場はどうあるべきか、また嘉穂劇場に期待することなどを伺い、今後、活用検討委員会で新たな活用策を審議する際の参考資料とするためにヒアリングを実施しました。概要は以下のとおりです。

### ① 対象者

嘉穂劇場をこれまで支援してこられた方、実際に嘉穂劇場を使用していた方、  
周辺商店街、周辺住民の方など 18人（団体）

### ② ヒアリング期間

2022（令和4）年5月30日 ～ 2022（令和4）年7月8日

### ③ ヒアリング内容

これまでの嘉穂劇場との関わり、嘉穂劇場に対する『評価』・『思い』、  
今後の嘉穂劇場に対する期待 等

### ④ ヒアリング結果（抜粋）

下記のとおり

#### <嘉穂劇場の評価>

- ✓ 嘉穂劇場は桝席や花道などが存在する無二の劇場であり、飯塚市民のシンボルになり得るものである。嘉穂劇場の「不便さ」を含め、このままの形で残してほしい。
- ✓ 嘉穂劇場は小屋主との一体感を感じる場所であった。嘉穂劇場はここにしかない劇場である。
- ✓ 桝席についてはフラットになればさらに活用の範囲が広がるのではないか。
- ✓ 嘉穂劇場は、子どもたちの教育の場、発表の場としても貴重な存在である。
- ✓ 嘉穂劇場は利用料が高額であったため、演劇の会場としての利用を考えたも、大道具を取扱う裏方の雇用経費が捻出できず、使いづらかった。
- ✓ 地元の商店街や地元住民においては、劇場との関わりが少なく、嘉穂劇場はどちらかといえば敷居の高い存在であった。

#### <今後の嘉穂劇場に期待すること>

- ✓ 大物の役者が定期的に使ってくれるような劇場になっていくことに加え、地域住民が利用できる施設であってほしい。
- ✓ 海外から人を呼びこむのに嘉穂劇場は身近で気軽に訪れ、文化に触れるこ

とができる施設としてもっと売り出したほうがよい。嘉穂劇場は観光資源としても必要な施設である。

- ✓ 劇場前の駐車場は広場など他の目的に使い、駐車場については周辺の民間事業者が経営する駐車場との連携を強化して確保すべき。
- ✓ 大型バスを利用する観光客の乗降場所は確保してほしい。
- ✓ 機材のデジタル化や映像による演出が可能になるような設備の導入、昭和40年代に整備された楽屋の改修を望む。
- ✓ これまで劇場と地域住民のつながりの歴史は残念ながらなかったが、今後施設を維持していくのであれば地域の人々が嘉穂劇場をバックアップしていく体制が必要ではないか。
- ✓ 市民が利用しやすい劇場であるよう、営利と非営利とで料金設定を分けるなどの工夫があってもいいのではないか。

#### <まちづくりの観点から>

- ✓ (イベント開催時のアンケートで) 嘉穂劇場の周りに店舗(食事処や土産物店等)がないのがネックとの回答あり。周辺のまちも盛り上がる企画が必要。
- ✓ 人流が増加することによって、空き店舗もお客様のニーズに合った店舗に変化していかなければならない。
- ✓ 劇場を保存することは簡単だが、維持して活用していくのは難しいことと思う。町内も世帯数が減少傾向にあり、隣組が機能しない場所も出てきた。町内としても、まちが元気になるような取り組みを期待する。
- ✓ 嘉穂劇場を単体で考えるのではなく、周辺部とが一体となって、まちで時間を過ごすことのできる空間づくり、賑わいづくりが必要である。
- ✓ 嘉穂劇場を核として文化を大切にす飯塚に愛着を持つ人が集まってくるまちづくりを進める必要がある。

これらのことから、嘉穂劇場の文化財としての評価と芝居小屋としての歴史、評価などを踏まえると、嘉穂劇場は本市の歴史を語り、文化的価値を生む、欠かせない施設であると捉えることができます。また、現存する芝居小屋の中では最も規模が大きく、希少性が高い施設であり、文化的にも地域経済的にも嘉穂劇場を核に本市に人を呼び込むことのできる可能性を持つ劇場であるということができ、嘉穂劇場は今後とも保存し、活用していくにふさわしい劇場であると考えます。

## 2 これからの嘉穂劇場が担っていく性格の整理

嘉穂劇場がこれまでに果たしてきた役割、そしてそれに伴う評価について、上記のとおり活用検討委員会内で共通認識に立ったのち、これからの嘉穂劇場が担っていく性格、期待する性格について協議し、次のとおり整理しました。

### (1) これからの嘉穂劇場が担う性格

#### ①劇場（芝居小屋）（文化施設）であること

- ・ 演者に扱われる施設であること
- ・ 観覧者が楽しめる施設であること

#### ②公共施設であること

- ・ （施設の形態を生かした使い方であって、）文化施設・劇場として多目的に使える施設であること
- ・ 障がいのある方にも配慮した施設であること
- ・ 年齢を問わず、利用できる施設であること

#### ③国内外の観光資源となり得るものであること

- ・ 劇場空間を楽しむ仕掛けがあること
- ・ 繰り返し訪問したくなる、あるいは訪問者が発信者となって国内外の新たな観光客を呼び込む仕掛けがあること
- ・ 観光客を呼び込む仕組みが儲かる仕組みにつながるものであること

#### ④文化財であること

- ・ 創建時から今日までの形式・仕様（平面・構造・意匠等）を保存することが一、活用に伴い部分的な変更が生じても、元の形に戻すことができること
- ・ 地域の歴史を学ぶ、地域の文化を学ぶことが可能であること

嘉穂劇場は、災害による一時的な閉館はあったものの、これまで90年間にわたって途絶えることなく運営されてきたという他に類を見ない特徴を持った劇場です。この劇場から発信されてきた娯楽や芸能が地域の人々の心の支えとなり、今日までその役割を果たしてきたことを考えると、この施設が今後とも『劇場（※1）』としての性格を持ち

続けていくことをこの施設の基本とします。なお、ヒアリングしたほとんどの方々からは、現存のままの保存、利用を希望する声が聞かれました。

そのうえで、劇場として使用しない時には、劇場の特異性を生かした市民ホール、文化ホール、アートスペースとして、市民をはじめ、市外の方々にも活用が可能となる多目的公共施設としての性格を持つ施設として整理します。嘉穂劇場は歴史を感じさせるユニークな存在であり、最先端技術や観光等に関する MICE (※2) の誘致も可能ではないかと考えます。

一方で、嘉穂劇場は日本文化、日本芸能を伝える素材が多く残る施設であり、昭和時代を懐かしむ日本人はもちろんのこと、日本文化に関心を持つ外国人をも十分魅了する力のある施設です。劇場のユニークさに加え、劇場を取り巻く地域の歴史を学び、新しい「体験」ができる観光資源として機能する施設であることが、劇場活用の幅を広げ、さらに劇場利用者を増やすことにつながると考えます。

最後に、これからも嘉穂劇場は文化財としての価値、性格をこのまま引き継いでいくことを期待します。嘉穂劇場は「国土の歴史的景観に寄与しているもの」という登録基準を満たし、国の登録有形文化財（建造物）となっています。これは、石炭により繁栄した筑豊の歴史と、娯楽を楽しんだ人々の暮らしと文化を伝える建築が今なお飯塚に残り、地域の豊かな歴史的景観に寄与する存在として評価されたものです。

このことから嘉穂劇場は、これまでの地域文化や変遷を伝える施設にとどまらず、芝居小屋の機能をこれからも維持し、活用していくことによってこれからの新しい文化創造の歴史を刻んでいく施設であると位置づけます。建設当初の外観をはじめ、室内意匠や建築構造、そして芝居小屋の機能を今日まで維持し続けてきた嘉穂劇場は、これからも新たな活用策を積み上げていくことで、文化財としての歴史を重ねていくことができると考えます。

※1)劇場とは・・・観客を集めて芸能を上演して見せる場所。(一般社団法人日本劇場技術者連盟 HP より)

※2)MICE とは・・・企業等の会議 (Meeting)、企業等の行う報奨・研修旅行 (Incentive Travel)、国際機関・団体、学会等が行う国際会議 (Convention)、展示会・見本市、イベント (Exhibition/Event) の頭文字のことであり、多くの集客交流が見込まれるビジネスイベントなどの総称。(観光庁 HP より)

## (2) 嘉穂劇場とコスモスコモンとの性格の整理

飯塚市の文化施設、観光資源において、上記の4つの性格をすべて持ち合わせる施設は嘉穂劇場以外にはありません。しかしながら、文化施設であり、公共施設である建物として、市内にはコスモスコモンが存在します。

これまでコスモスコモンと嘉穂劇場とのすみ分けについては、コスモスコモンが整備された当初、『嘉穂劇場はその存立の歴史と現状から、古典芸能・大衆芸能の専門劇場として、一方の市立文化ホールは、現代舞台文化に親しめるホールとして、つまり互いの施設は、車の両輪として飯塚市民の舞台文化を育み薦める場』(※)であると整理されていたようですが、これからは両者の役割を演目の整理にとどまらず、

「コスモスコモンは市民の文化に触れるすそ野を広げる役割をもつ施設として、一方、嘉穂劇場は他にはない飯塚の『とんがった魅力』を引き出す施設」として役割・性格を整理し、両者の共存共栄が本市の文化振興の発展、地域の活性化に大いに寄与するものであると考えます。

## 3 これからの嘉穂劇場に期待されること（ターゲットと機能）

2で整理したこれからの嘉穂劇場の持つ性格から、これまでの活用検討委員会の中で多くの委員がイメージした利用者を整理し、これからの嘉穂劇場に期待するイメージを下記の表現で整理しました。ただし、この作業は下記以外の利用者を排除しようとするものではなく、改めて嘉穂劇場の利用者を再確認することで、嘉穂劇場をさらに特徴づけ、これからも多くの方々に大切にされ愛される施設として存在するための目標として整理したものです。

- 市民が利用でき、市民が誇れる劇場に
- 子どもたち・家族が思い出を作り、子どもたち・家族に愛される劇場に
- 演者から扱われ、繰り返し使ってもらえる劇場に
- 外国人にとって日本文化を体感でき、大きな興味を持ってもらえる劇場に

(※) 飯塚文化連盟名誉会長小出和典氏寄稿『季刊高校演劇』(2013. 4)より抜粋

## 4 嘉穂劇場と地域経済の活性化

嘉穂劇場と地域経済との関係について、劇場としての視点と観光資源としての視点から整理します。

### (1) 劇場としての嘉穂劇場と地域経済の活性化

現在の嘉穂劇場周辺の人通りを見ると、昭和通りや東町商店街の人通りは減少傾向にあり、市内の他の商店街と比較してもこの傾向は顕著です。

劇場は、一般的に休日や夕方から興行が行われることが多く、平日昼間の利用は少ない傾向にあります。このため、ややもすると市内に賑わいをもたらすはずの中心市街地に、嘉穂劇場を中心とした空洞化が生じかねません。加えて、このまま嘉穂劇場の休館が続けば、劇場を含む中心市街地の賑わいは低下し、地域経済・地域の活力の低下は容易に想像することができます。

嘉穂劇場が立地する周辺地域に賑わいをもたらすためには、これから再開する嘉穂劇場を平日いかに利用していくかが問われます。それは、市民が日常的にどれくらい嘉穂劇場を使い続けていくか、嘉穂劇場を利用することでどれだけ心の豊かさを体感することができるかにかかっています。

一方で、令和4年11月には郊外に大型農産物直売所であるカホテラスがオープンし、令和5年夏には菰田堀池地区にゆめタウンが開設される予定となっています。これらの大型商業施設は飯塚市の交流人口を増加させ、消費活動を活発にさせるメリットを大いにもたらしめます。この人の流れをチャンスに変えていくためには、これら施設ではできないこと、例えば平日昼間に嘉穂劇場を中心としたイベントを定期開催することによって、周辺エリアが一体となり商店街に賑わいをつくることも方策の一つと考えます。

かつて、嘉穂劇場では全国座長大会が開催されていた時に、商店街で役者の「お練り」が行われていました。お練りの実施は多くの関係団体が協力し、まちを盛り上げるという共通の目的を持って実施されてきたものです。

これからも嘉穂劇場と周辺の商店街関係者、その他多くの関係者とがまちの賑わいづくりのためにイメージするゴールを共有するため、早期に関係者間で協議の場を持ち、多くの人に関わりながらそれぞれが魅力を発揮し、その相乗効果で地域経済の活性化を図っていくことが重要です。

### (2) 観光資源としての嘉穂劇場と地域経済の活性化

観光による消費はあらゆるサービスに及ぶため、地域経済への波及効果は大きなものがあります。嘉穂劇場は本市中心市街地に位置するとともに、周辺には江戸時代の長崎

街道の飯塚宿跡が存在し、史跡が残るエリアでもあります。このようなエリアで、飯塚市の文化・芸能の中心となる嘉穂劇場が中核的な施設として集客力を持つようになると、周辺の観光施設や商業施設との連携により大きな相乗効果、および経済的波及効果を発揮するだろうと予想できます。また、炭鉱遺構や旧伊藤伝右衛門邸などの同時代を偲ぶ観光資源との相乗効果も容易に推測できます。このため、さらに地域経済への波及効果を高めるためには、人々の滞在時間を長くする必要があります。

人々は、観光の際のエリア決めには芝居鑑賞や文化財、文化遺産の見学だけでなく、ショッピングや食事にも大きな関心を寄せます。嘉穂劇場の再開の際には周辺商店街でも人々が滞在・回遊し、時間も含めて消費できるような環境づくりが求められます。

飯塚市は、福岡市にも北九州市にも車で1時間以内で行ける位置にあるため、地理的に有利な条件も観光政策に生かすことができます。

飯塚市内に宿泊する観光客による経済効果は勿論、他都市に宿泊する観光客（国内外含む）に対しても劇場周辺での飲食・ショッピングや地域の強みを活かした体験プログラムなど数時間の滞在・周遊プランを提供することができれば、旅行消費額の向上につながり、地域経済への良好な影響を示していくことができると考えます。

## 5 再開のために取り組むべきこと

2、3 で整理した、これからの嘉穂劇場が担う性格と期待される役割を踏まえ、嘉穂劇場の再開にあたり、嘉穂劇場の有する文化的価値を損なうことなく、新たな活用による新たな価値を付加していくために考えるべき視点を以下の5項目に整理しました。

- 嘉穂劇場の合理的配慮の視点
- 多目的施設としての設備の工夫
- 舞台裏の整備など、演者から愛される施設となるために必要なこと
- 嘉穂劇場の運営を福岡市と北九州市などとの広域的な連携の視点で考えていくこと
- 再開まで市民等の嘉穂劇場に対する関心を高め、市民の利用・活用への期待感をもってもらうための取り組みの継続実施

- ✓ 障がいのある方や正座のできない方に対する合理的配慮と江戸時代の歌舞伎様式をもつ芝居小屋の形をどこまで残していくか、この両者のバランスをどのようにとっていくか丁寧に考える必要がある。
- ✓ 今の施設に利用制限があるのであれば、より多くのイベントや企画に対応できるように、本体に傷つけない程度の簡易的な取り外し可能なものを用意するなど工夫があったほうがよい。また柵席は、見学の際には柵席を見てもらうが、使うときには用途によって木枠をはずすことができるなど工夫できないだろうか。
- ✓ 演者は手動の不便さも受け入れており、古き舞台機構は残していくべき。ただし、演者にとって舞台裏の快適さは必要なものとして、新しい機能を付加することを考えたほうがよい。
- ✓ 飯塚市は福岡市にも北九州市にも近い距離にあるために、嘉穂劇場が福岡市や北九州市の劇場と連携することで、それら施設とは異なった演出の同一演目を嘉穂劇場で開催することができ、興行者にとっても観覧者にとってもメリットがあると感じる。より広域的な連携の視点で劇場運営について考えると利用価値が高まる。
- ✓ 嘉穂劇場に対する関心を高めるためのアプローチは子どもたちに対しても必要で、子どもたちに存在を知ってもらい、劇場の利用者として巻き込んでいく必要がある。また、市民にファンになってもらう取り組みは、再開前から行っていくべきであり、すぐにでも始められることである。

上記の視点を踏まえ、劇場の再開のために今後取り組む必要があると考えられることを、以下のとおりいくつかの時間軸の中で検討する項目として整理しました。

## (1) ハードの視点から

### ① 再開までに早期に取り組むこと

- ・屋根の改修や耐震補強等による安全対策
- ・柵席の改善などによるバリアフリー化
- ・劇場前駐車場の多目的スペース化
- ・必要な舞台設備の改修（照明、音響、機器のデジタル化 等）
- ・快適な観覧環境・見学環境の整備（空調機器の再整備、見学ルートの整備 等）

### ② 中期的な視点で取り組むこと

- ・劇場内の展示室を1階に移設する等、障がいのある方への合理的配慮

### ③ 長期的な視点で取り組むこと

- ・演者に喜んでもらえる施設であるための施設・設備改善（大道具の搬入の簡便さ、快適な楽屋の確保 等）
- ・周辺市街地と一体になって盛り上がりが醸成できる街並みや景観整備（ハード面）

## (2) ソフト事業の視点から

### ① 開館までの期間に取り組むこと

- ・市民、外国人、子どもたちに対する情報発信の強化
- ・嘉穂劇場に対する関心を繋ぎとめるための各種イベントの開催（ワークショップ、講演会、劇場前広場を活用したイベント 等）
- ・費用をかけず広報できる手法等の検討（TV企画の活用、全国に発信できるフリーペーパーの活用 等）
- ・かつての嘉穂劇場を支援、利用してくれていた演者等への近況報告
- ・運営管理の方法と市民参画のあり方、周辺商業施設との協力関係のあり方についての検討、決定
- ・劇場経営をサポートするファンクラブの検討
- ・地域や劇場の歴史とともに劇場について楽しく紹介できる人材の育成
- ・劇場内の文化的価値を有する資料（小道具、ポスター、チケット等）のアーカイブ化と展示及び多言語化対応
- ・見学者、観光客を受け入れるソフト事業の準備（魅力的なホームページ開設、お土産・オリジナルグッズなどの商品開発、体験プログラムの開発、劇場案内の工夫（DVD等の用意）等）

### ② 現在実施している耐震診断調査の結果が「入場可能」の場合（工事着工前）に取り組むこと

- ・期日を決めての劇場（文化財）見学会の開催

### ③ 改修工事期間に取り組むこと

- ・期日を決めての工事見学会の開催

## 6 嘉穂劇場の新たな活用や再開に向けた様々な提案

これまでの活用検討委員会では、これからの嘉穂劇場にさらに多くの人々が訪れ、賑わいと交流を創出する空間として利用されるために取り組むこととして、各委員から様々な提案がなされました。ここにその一部を紹介します。

- ✓ 「シルク・ドゥ・ソレイユ」が嘉穂劇場でやれば、とても面白い演出が可能なのではないかと。嘉穂劇場は広さがあり、それが魅力である。
- ✓ e-スポーツを嘉穂劇場でやると話題になる。e-スポーツに限らず、何かの『聖地』を狙うことが大切ではないか。毎年必ず実施される『聖地づくり』が大切である。
- ✓ 市内大学の卒業式や成人式での記念撮影などをはじめとして、歴史的な空間で記念写真が撮れる場所として劇場を活用する。
- ✓ 市内の小学校と連携し、1/2 成人式や各種行事を行う場所として活用し、子どもたちの教育の場、思い出の場とする。
- ✓ 資料のアーカイブ化だけでなく、嘉穂劇場に関する様々な図書を整理して展示する空間を作ってはどうか。劇場内の生きた資料と合わせて飯塚の文化や歴史を掘り下げる空間として活用できる。
- ✓ 再開した嘉穂劇場の運営に関して、大学生ボランティアも劇場運営のお手伝いができるのではないかと。そうすることで、市内大学生にも嘉穂劇場を印象付けることができる。
- ✓ 大学生等の力を活用し、嘉穂劇場と周辺を含めたエリア整備やソフト事業にデザイン思考と柔軟な発想を取り入れ、国内外に情報発信を。映えスポットやグッズ開発の公募などで大学生ら若者の力を活用できる。
- ✓ YouTube はビューアの獲得だけでなく、アーカイブとしても残していける。また一つの作品としてでも使うことができるため、汎用性が高い。このようなツールを活用していくべきである。
- ✓ Web の作成は、外国人に対する情報提供も意識する必要があるが、海外に向けた Web は特にデザイン性が重要であることを意識してほしい。また、やれるところからやってほしい。
- ✓ 劇場の駐車場にキッチンカーを配置してイベントを実施するなど、館内の見学・利用が不可能な時期であっても、駐車場を使って関心を繋いでいく、賑わいを作っていくことが大切である。
- ✓ 嘉穂劇場のライトアップなどは休館中でもできる取り組みである。現在、文化財

のライトアップによる観光客誘致が各地でもみられている。

- ✓ 劇場にとどまらず、周辺商店街などでも広くのぼり旗を立てて、お客様を誘導するような取り組みがあったらいい。
- ✓ 嘉穂劇場周辺の駐車場や商店街と協力して、芸能人によるスプレーアート等のTV企画を誘致することで、劇場の集客や認知度のアップが図れるのではないか。訪れた人の発信で拡散力のアップにもつながる。
- ✓ 公共施設となった嘉穂劇場が地域で大切にされ、残っていくためには、運営に市民が参画していくことが重要である。また、施設管理者は劇場運営そのものが「地域をつくる」という意識を市民と共有していくことが大切である。

## 7 嘉穂劇場再開の時期について

嘉穂劇場が休館して1年以上経過しました。2021（令和3）年9月に飯塚市に贈与されましたが、90年もの間現役で運営を続けてきた嘉穂劇場は老朽化が進み、再開に当たっては耐震補強をはじめ早期の安全対策の取り組みが必要な状況となっています。

現在、飯塚市教育委員会では劇場の耐震調査及び耐震補強計画案の作成を2024（令和6）年2月末までの予定で実施しています。

本格的な改修工事はその後に着手されることを考えれば、少なくとも再開までには2～3年かかると見込まれますが、すでに休館して1年以上が経過しており、利用できない期間が長期にわたることを大変危惧しています。周辺に様々な施設ができ、利用者も新たな施設へと流れるだけでなく、市民の嘉穂劇場に対する思いも薄れ、嘉穂劇場の存在が忘れられないか大変気がかりです。段階的に開場することも含め、少しでも嘉穂劇場の再開を早める方法を模索していくことを要望します。

## 結びに

かつて休館していた芝居小屋で再興を果たした施設に、内子座（愛媛県）や八千代座（熊本県）があります。これらの芝居小屋と嘉穂劇場との大きな違いは、内子座や八千代座が株主を募り、多くの有志で経営してきた施設であったのに対し、嘉穂劇場は長い間個人経営主が演者との大きな信頼関係を築きながら経営してきた点にあります。このため、嘉穂劇場は経営主との深い人間関係の構築のもとで思い入れのある劇場としてこれまで多くの演者に愛されてきた劇場だと考えます。

このような嘉穂劇場の特性は、一方でこれからの劇場にとっては課題の一つとして捉えることができます。

私たちは、新たな価値の創造や様々な体験を重ねることのできる嘉穂劇場を次代を担う子どもたちに引き渡していく責任があります。そのためには今後、どれだけの市民が嘉穂劇場を「自分事」として捉え、主体的、持続的に劇場運営に関わってくれるか、そしてそのような市民とともに歩んでいくことができるかが、嘉穂劇場の未来に大きく関わっています。

市民の劇場運営に関わるあり方は様々です。客席に座る人々、舞台上立つ人々、様々な形で劇場を支えてくれる人々を含め、再開までの間にあらゆる手法を用いて市民が嘉穂劇場に触れ、積極的に関わる場面をつくり、嘉穂劇場にふさわしい市民参画のあり方を探っていく必要があると考えます。

一方で、嘉穂劇場はその特異性を生かして、外部から新たな人々を呼び込み、この場所が新たな芸術を創造する拠点として利用される可能性を秘めています。

来訪者との融合で新しいものが生まれ、それがひいては飯塚ブランドになり、市民のアドバンテージになる可能性も持つ劇場であると考えます。

1年以上の休館が続く中、早期の再開を望む声が多い嘉穂劇場について、劇場として再開するための議論は勿論ですが、この議論を通じて市民、地域企業等とともに将来のまちづくりについて考える機会となることは意義あることと考えます。

今後、情報発信をさらに強化し、公共施設となったこの機会をチャンスと捉え、市民をはじめ多くの関係者を巻き込みながら劇場を活用した文化芸術の発信とまちの賑わいづくりについて、未来志向で確実な取り組みを進めていかれることを願います。

嘉穂劇場が多くの市民の期待に応え、また新たなエンターテインメントを創出、発信する施設として、一日でも早く賑わいを取り戻す日が来ることを心待ちにしております。